

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H04410

研究課題名(和文) 地方大学における総合的な地域資料の展示公開モデルの構築

研究課題名(英文) Studies on Model for displaying of regional materials in regional university

研究代表者

五十嵐 太郎 (IGARASHI, TARO)

東北大学・工学研究科・教授

研究者番号：40350988

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：合計31回、講師のレクチャーを実施した後、毎回1時間程度の議論を行った。建築家、キュレーター、研究者、アーティストなど、様々な角度から展示の可能性を分析した。また合計15回の調査旅行を実施した。コロナ禍のため、海外はイギリスのみだったが、各地の大学博物館、美術館などをめぐり、現地で多くの知見を得た。展覧会としては「宛先のない作用#0」展(2020年)と「トランス・コネクション」(2022年)を開催したほか、山形ビエンナーレ2022に参加し、会場構成、什器のデザインと制作を行い、リサーチ・プロジェクト「文翔館の時間と空間をひもとく」を発表した。最後に全188ページの報告書を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

博物館の建築デザインは多く研究されているが、展示の手法については不十分である。世界の博物館は展示デザインをアップデートしているが、残念ながら、日本ではデザインがないか、特定のディスプレイ会社による決まったパターンになっている。こうした状況で、調査と実践を通じて、多角的な視点から日本に新しい展示デザインの意義と可能性を確認することができた。また大学博物館も、地域資源を展示し、社会に伝える場として重要である。その際、ただ学術研究の成果発表に終わるのではなく、アートを絡めた展示の手法や、デザイナーによる空間の構成などを導入することによって、大きな効果をもちうることで様々な事例と実践から提示した。

研究成果の概要(英文)：A total of 31 face-to-face or online lectures and discussions were held by architects, curators, researchers and artists. We analyzed the possibilities of exhibition from various angles. A total of 15 survey trips were also conducted. Due to the covid-19 crisis, it was difficult to go abroad except the UK, but we gained a lot of knowledge there by visiting university museums and museum of fine arts in various places. In terms of exhibitions, in addition to holding the "Effect without Address #0" exhibition (2020) and "Trans Connection" (2022), we participated in the Yamagata Biennale 2022, where we not only designed space and furnitures for the venue, but also exhibit a research project titled "Exploring the Time and Space of Bunsho-kan". Then a 188-page report book was created.

研究分野：建築学

キーワード：建築 大学博物館 展示デザイン キュレーション

1. 研究開始当初の背景

従来、博物館の建築デザインは多く研究されているが、ハコとしての空間が主なテーマとなり、展示の手法については不十分である。一方で、世界の博物館、大学の博物館は展示デザインを洗練させ、現代的なものにアップデートしているが、残念ながら、日本ではほとんどの場合、デザインがないか、特定のディスプレイ会社による決まったパターンの展示になっている。国内では、東京大学、京都大学、北海道大学などの博物館で新しい展示の取り組みに着手しているが、東北地方では行われていない。

2. 研究の目的

今回の研究チームは、縄文土器をあえて形態の視点のみから陳列した「先史のかたち」展(2016年)、東北大学の様々なコレクションを模型という切り口から再構成した「模型世界」展(2017年)などをギャラリートンチクにおいて、実験的に開催しており、その試みをさらに発展させることを主要な目的としている。海外調査では、大学が長い歴史をもつイギリスの博物館などをまわり、どのように展示が行われているかを記録することが必要だと考えた。また国内においては、ばらばらに興味深い展示の事例は確認できるが、まとまった体系的な調査や分析がないため、関係者へのヒアリングや招聘してレクチャーと討議を行うことによって、人のネットワークをつくりながら、知見を蓄積することをめざした。

3. 研究の方法

合計31回、特筆すべき展示を企画したり、デザインしている講師のレクチャーを実施した後、毎回1時間程度の議論を行った。建築家、キュレーター、研究者、学芸員、アーティストなど、様々な角度から展示の可能性を分析した。また合計15回の調査旅行を実施した。コロナ禍のため、海外で訪れることができたのはイギリスの大学博物館のみだったが、日本各地の大学博物館、美術館などをめぐり、現地で多くの知見を得た。研究チームが企画し、開催した展覧会としては、市内の百貨店フォーラスを会場としながら、大学のコレクションをもとに、研究者とアーティストが対話し、作品をつくる「宛先のない作用#0」展(2020年)と、特殊な展示仕器を用いた「トランス・コネクション」(2022年)があげられる。また山形ビエンナーレ2022に参加し、メイン会場の空間構成、ならびに作品を展示する仕器のデザインと制作、アーティストのサポートを担当すると同時に、調査にもとづく展示も行った。山形の歴史的な建造物である会場そのものを重要な地域資産とみなし、リサーチ・プロジェクト「文翔館の時間と空間をひもとく」の立体的なパネルを発表した。これらの企画を実現するプロセスにおいて、研究者、アーティスト、建築家との共同作業を実施し、展示の方法論を検討した。

4. 研究成果

コロナ禍のために活動が制限された状況ではあったが、オンラインも活用しながら、様々な調査と実践を通じて、多角的な視点から日本に新しい展示デザインの意義と可能性を確認することができた。また大学博物館も、地域資源を展示し、社会に伝える場として重要である。その際、ただ学術研究の成果発表に終わるのではなく、アートを絡めた展示の手法や、デザイナーによる空間の構成などを導入することによって、研究に異なる視点を持ち込んだり、来場者に興味をもってもらい、建築・美術のメディアにとりあげてもらいなど、大きな効果をもたらすことを様々な事例と実践から提示した。

最後に全188ページの報告書を作成し、印刷した。この報告書と、講師によるレクチャーと議論の記録は、今後、求めがあれば、配布、もしくは公開する。またこうした展示の方法論をめぐるとまとめたテキストは貴重なものなので、出版ができないかを検討している。以下に目次など、概要がわかるかたちで、報告書の一部を添付する。

目次

はじめに 4

プロジェクトはいかに始まり、どのように展開したか 五十嵐 太郎
 実践と研究の間で 土岐 文乃
 音信不通からはじまった縁 田村 光平
 共同研究への参画と新たな知見 加藤 諭
 パンデミックのなかの研究 市川 龍司

第一部 展覧会

- 「宛先のない作用 #0: ダイガクにねむるモノにまつわるゲイジユツ展」 8
 展示パネル／取材／展示風景／博物館及び大学博物館年表
- 山形ビエンナーレ 2022 22
 「文翔館の時間と空間をひもとく」／会場設計／
 什器デザイン／制作支援アーティスト
- 「トランス・コネクションー建築と(して)のあいだ」展 48

第二部 レクチャー 50

浅子 佳英／中村 覚／加藤 幸治／藤井 素彦／榎野 展正／
 暮沢 剛巳／木下 史青／吉野 弘／齋藤 歩／伊達 伸明／三宅 拓／
 謝 宗哲／野林 厚志／小金沢 智／上田 假奈代／小田 昌教／
 田口 かおり／武藤 隆／貝沼 泉実／西澤 徹夫／清水 建人／
 山岸 綾／鈴木 紀慶／神野 由紀／鷺田 めるろ／鎌田 友介／
 新藤 淳／高山 明／遠藤 治郎／山内 宏泰／佐々木 慧

第三部 調査旅行 82

東京大学／京都大学／石川／広島／東京ミッドタウン／
 イギリス（グラスゴー／エディンバラ／ロンドン／
 オックスフォード／マンチェスター／ケンブリッジ）／
 群馬／青森／山形・秋田／東京／青森／山形／群馬／静岡／岡山・山口

関連資料 118

- ・関連展示の記録
 「先史のかたち」展／「模型世界」展／「学の生態系」／唐櫃美術館
- ・原稿再録
 「地方大学の学術資料を用いた展示公開モデルを探る」／
 イギリスの大学博物館ダイアグラム／「大学博物館と展示デザイン」／
 「山形ビエンナーレに参加し、様式分類を疑う」
- ・レクチャーのレジュメ（藤井 素彦／齋藤 歩／三宅 拓也）
- ・調査旅行の報告書
 （松田 陽／広島大学総合博物館の取り組みについて／山形 岡部 信幸・三瀬 夏之介）
- ・「斎藤報恩会文書」催事年表（抜粋）
- ・科研の申請書類（抜粋）

2 レクチャー

第 1 回	浅子 佳英	2019年 5月25日
第 2 回	中村 覚	2019年 6月20日
第 3 回	加藤 幸治	2019年 6月20日
第 4 回	藤井 素彦	2019年 7月29日
第 5 回	榎野 展正	2019年 11月 6日
第 6 回	暮沢 剛巳	2020年 5月27日
第 7 回	木下 史青	2020年 6月26日
第 8 回	吉野 弘	2020年 7月 8日
第 9 回	齋藤 歩	2020年 7月22日
第10回	伊達 伸明	2020年 9月28日
第11回	三宅 拓也	2020年 11月30日
第12回	謝 宗哲	2020年 12月 7日
第13回	野林 厚志	2020年 12月11日
第14回	小金沢 智	2020年 12月22日
第15回	上田 假奈代	2021年 2月25日
第16回	小田 昌教	2021年 3月19日
第17回	田口 かおり	2021年 5月18日
第18回	武藤 隆	2021年 6月17日
第19回	貝沼 泉実	2021年 6月22日
第20回	西澤 徹夫	2021年 6月28日
第21回	清水 建人	2021年 7月 5日
第22回	山岸 綾	2021年 7月29日
第23回	鈴木 紀慶	2021年 8月23日
第24回	神野 由紀	2021年 8月30日
第25回	鷺田 めるろ	2021年 9月21日
第26回	鎌田 友介	2021年 9月28日
第27回	新藤 淳	2021年 10月11日
第28回	高山 明	2021年 10月19日
第29回	遠藤 治郎	2021年 11月11日
第30回	山内 宏泰	2021年 12月16日
第31回	佐々木 慧	2022年 12月14日

3 調査旅行

第 1 回	東京大学	2019年 6月19日
第 2 回	京都大学	2019年 6月24日 ～ 6月25日
第 3 回	石川	2019年 7月 5日 ～ 7月 7日
第 4 回	広島	2019年 8月23日 ～ 8月25日
第 5 回	東京ミッドタウン	2019年 8月31日 ～ 9月 1日
第 6 回	イギリス	2019年 9月 5日 ～ 9月14日
第 7 回	群馬	2020年 11月13日 ～ 11月14日
第 8 回	青森	2021年 1月22日 ～ 1月23日
第 9 回	山形・秋田	2021年 3月16日 ～ 3月17日
第10回	東京	2021年 7月 8日 ～ 7月 9日
第11回	青森	2021年 8月27日 ～ 8月29日
第12回	山形	2021年 9月23日 ～ 9月24日
第13回	群馬	2021年 10月 2日 ～ 10月 4日
第14回	静岡	2021年 12月10日 ～ 12月12日
第15回	岡山・山口	2021年 12月17日 ～ 12月19日

(文章：五十嵐太郎)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤諭	4. 巻 16
2. 論文標題 斎藤報恩会博物館の設立過程と運営方針	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東北大学史料館研究報告	6. 最初と最後の頁 pp.1-15.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤諭	4. 巻 46
2. 論文標題 大学アーカイブズの理念と活動・実践：東北大学史料館を事例に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学図書館問題研究会誌	6. 最初と最後の頁 pp.31-41.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤諭	4. 巻 89
2. 論文標題 東北大学に残る大正期の二つの建物 片平キャンパスの歴史的建造物から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 まなびの杜	6. 最初と最後の頁 pp.28-29.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐太郎	4. 巻 48(14)
2. 論文標題 地方大学の学術資料を用いた展示公開モデルを探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 pp.141-153.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐太郎	4. 巻 11
2. 論文標題 山形ビエンナーレに参加し、様式分類を疑う	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 建築ジャーナル	6. 最初と最後の頁 pp.32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五十嵐太郎	4. 巻 3
2. 論文標題 磯崎新におけるビルディングタイプの変容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 建築東京	6. 最初と最後の頁 pp.8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤論	4. 巻 18
2. 論文標題 戦前期斎藤報恩会における社会事業と催事助成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北大学史料館研究報告	6. 最初と最後の頁 pp.49-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤論、曽根原理、岡安儀之、小嶋翔、仁平政人、杉本欣久、伴野文亮	4. 巻 18
2. 論文標題 阿部次郎と法文学部	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北大学史料館研究報告	6. 最初と最後の頁 pp.87-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鹿又喜隆、菅野智則、加藤諭、曾根原理	4. 巻 18
2. 論文標題 東北考古学の礎 - 東北大学奥羽史料調査部から現在へ -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北大学史料館研究報告	6. 最初と最後の頁 pp.87-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 加藤諭
2. 発表標題 デジタルアーカイブの文脈
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第5回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田村光平
2. 発表標題 古人骨の三次元計測：SfMとレーザースキャナーの比較
3. 学会等名 日本情報考古学会第44回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤諭
2. 発表標題 東北大学の歴史、学術資源研究公開センター史料館の取り組み
3. 学会等名 令和元年度第10回URA連携協議会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤諭
2. 発表標題 近代日本における大学講堂の機能 - 東京帝国大学の学術催事 -
3. 学会等名 西安日本学研究会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤諭
2. 発表標題 東北大学史料館の資料内容について
3. 学会等名 地方大学における総合的な地域資料の展示公開モデルの構築 第2回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤諭
2. 発表標題 大学アーカイブズにおける学術資源の利活用～東北大学を事例に～
3. 学会等名 学術野営2019 in 能登半島
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 中村 陽一、高宮 知数、五十嵐 太郎、槻橋 修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 誠文堂新光社	5. 総ページ数 256
3. 書名 ビルディングタイプ学 入門	

1. 著者名 五十嵐太郎、菅野裕子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青幻舎	5. 総ページ数 168
3. 書名 装飾をひもとく	

1. 著者名 中村陽一・高宮知数・五十嵐太郎・槻橋修編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 誠文堂新光社	5. 総ページ数 255
3. 書名 ビルディングタイプ学入門	

1. 著者名 加藤諭	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 409
3. 書名 大学アーカイブズの成立と展開：公文書管理と国立大学	

1. 著者名 吉葉恭行・加藤諭・本村昌文編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 こぶし書房	5. 総ページ数 268
3. 書名 帝国大学における研究者の知的基盤	

1. 著者名 加藤諭 / 安達宏昭、籠橋俊光編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 東北史講義 近世・近現代編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

加藤諭が企画展示「東北考古学の礎 - 東北大学奥羽史料調査部から現在へ -」（東北大学史料館、2022年9月1日～12月23日）と企画展示「阿部次郎記念館新規資料及び法文学部開設関係資料公開展示「阿部次郎と法文学部」（東北大学史料館、2022年9月29日～12月23日）を担当した。
また田村光平が「Human Sociality: Comparative Studies of Social Evolution and Historical Dynamics」（東北大学片平キャンパス知の館、2022年8月10日～8月19日）の展示を企画した。

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田村 光平 (TAMURA KOHEI) (60725274)	東北大学・学際科学フロンティア研究所・助教 (11301)	
研究分担者	市川 紘司 (ICHIKAWA KOJI) (60757855)	東北大学・工学研究科・助教 (11301)	
研究分担者	加藤 諭 (KATO SATOSHI) (90626300)	東北大学・学術資源研究公開センター・准教授 (11301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土岐 文乃 (TOKI AYANO) (70635573)	東北大学・工学研究科・助教 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関